Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系高温超伝導体の バルクおよび薄膜の作成

松下辰彦¹⁾, 鈴木晶雄²⁾, 青木孝憲³⁾

寺本賢一郎4), 中右太禰宏5)

Preparation of High-Temperature Superconducting Bulk and Thin Films of Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O System

Tatsuhiko MATSUSHITA, Akio SUZUKI, Takanori AOKI Kenichiro TERAMOTO and Tanehiro NAKAU

A high-T_c phase of the Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O bulk superconductor was obtained under the sintering condition of $830^{\circ}C \times 50h$. The best starting composition was Bi_{1.84} Pb_{0.34} Sr_{1.91} Ca_{2.03} Cu_{3.06}. The sample showed the value of T_{c.end} = 99.0 K. The lamellar morphology was appeared on the SEM photograph of the surface of the sample.

Superconducting Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O films were grown on the MgO (100) substrate by the method of RF magnetron sputtering with three targets;

Bi₁Sr₁Ca₁Cu₂, Bi and Pb targets. The substrate temperature was 550° C. The value of $T_{c,end} = 64.9 \text{ K}$ was obtained at the annealing condition of 850° C × 7h. The free surface morphology of the sample was recognized by the SEM observation to be a mixture of needle-like and lamellar types. The composition ratio was analyzed to be (Bi_{0.05} Pb_{0.55})₁ Sr₁Ca_{0.92} Cu_{2.34} O_y after the annealing of 850° C × 7h by the method of inductively coupled plasma (ICP).

1. 緒言

1986年春の J.G.Bednorz と K.A.Müller による論文 "Possible High T_c Superconductivity in the Ba-La-Cu-O System"¹⁾ に端を発した高温超伝導体は、1950年代のトランジス ターの発見に匹敵するものとして来世紀の産業社会を築く基本工業技術の1つに挙げられ活 発な研究が続いている。その材料開発の進展は目覚ましく、Y-Ba-Cu-O系²⁾ においては、

平成2年3月30日原稿受理

1), 2), 3), 4), 5) 大阪産業大学 工学部

焼結体で転移温度(T_c)が90K以上、スパッタ法により形成された薄膜においても、液体 窒素温度77Kを越えている。さらに、Bi-Sr-Ca-Cu-O系(T_c=110K)³)、Tl-Ba-Ca-Cu-O 系(T_c=125K)⁴)が相次いで発見され、転移温度T_cは次々と上昇している。特にBi-Sr-Ca-Cu-O(BSCCO)系は希土類元素を含まない点で注目された。しかしながらこの BSCCO系は通常、少なくとも2つの超伝導相(80K級のlow T_c, 110K級の high T_c相) を含み、100K以上で完全ゼロ抵抗を達成することは困難であった。high T_c相の volume fractionを増加させる種々の試みがなされたが、Pbの添加が有効であった。 5 ⁻⁷

本報告では、この Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O(BPSCCO)系につき、Bulk および thin film の作 成法、抵抗特性、X線回折および SEM 観察の結果を述べたものである。^{8,9)} また bulk に ついては Bi-Sb-Sr-Ca-Cu-O(BPSSCO)系についても少しく検討した。¹⁰⁾

2. BPSSCO系バルク高温超伝導体

2.1 試料の作成

Fig.1に示すように Bi₂O₃, PbO, SrCO₃, CaCO₃, CuO の粉末を混合し、仮焼し、粉砕し、ペレットに加圧成型し、本焼し自然冷却により試料を作成する。仕込み組成比は **Table1**に試料A~Fにつき示している。即ち、試料A, Bについては low T_c相の組成比 Bi:Sr:Ca:Cu=1:1:1:2の BiをBi:Pb=0.95:0.05および0.85:0.15に変形し、 さらに試料Bについては Cuを少なくしたものである。試料C, Dについては、high T_c相 を与える組成比 Bi:Sr:Ca:Cu=2:2:2:3が熱処理後得られるようにしたものであ る。¹¹⁾ Bi と Pb の組成比の合計を2以上となるようにし、さらに Sr と Ca の比を等しく変 化させてある。試料E, Fについては high T_c相を与える Bi:Sr=2:2を Bi:Sb=2: 2としたものであり、このうち Bi:Pb=1.9:0.1 および 1.8:0.2 としたものである。¹⁰⁾

0 1	Calcination		Sintering		Composition ratio	Tc, end
Sample	temp(°)	time(h)	temp(°)	time(h)	Bi : Pb : Sr : Ca : Cu	(K)
A	850	24	850	50	0.95:0.05:1:1:2	53.3
В	830	24	830	50	0.85:0.15:1:1:1.5	95.6
С	830	24	830	50	1.84:0.34:1.91:2.03:3.06	99.0
D	830	24	830	50	1.84:0.34:1.97:1.97:3.06	95.7
					Bi : Sb : Sr : Ca : Cu	
Е	810	10	810	20	1.9:0.1:2:2:3	51.8
F	810	10	810	20	1.8:0.2:2:2:3	15.7

Table 1. Preparation of bulk sample

 Mix Bi₂O₃, PbO, SrCO₃, CaCO₃, CuO powders with planetary ball mill for 25 minutes

Ŷ

 Calcine loose powders at 810∼830 ℃ in air for 24 hours

Û

3..Crush ; planetary ball mill for 25 minutes

Û

4. Pelletize ; 1.5 mm × 1 cmø

Û

5. Sinter Pellets at 830~850 ℃ in air for 50 hours

Û

6. Spontaneous cooling to room temperature

Fig. 1 A flow chart for superconductor bulk sample.

2.2 試料の特性

いま試料A, Bを比較するとき試料AはBi:Sr:Ca:Cu=1:1:1:1:2でありlow T_c 相を与える組成比であるが、試料BはBi:Sr:Ca:Cu=1:1:1:1:5=2:2:2: 3すなわちhigh T_c相を与える組成比である。ここでBiの組成比を満たす量を変えずにBi +Pbとし、Bi:Pb=0.85:0.15とした試料Bの特性を**Fig.2**に示す。これよりT_{c.on}= 107.9K, T_{c.mid}=104.0K, T_{c.end}=95.6Kの良好な特性が得られた。またPbの添加効果 としてT_{c.end}付近の裾がなくなりhigh T_c相のvolume fraction が増加していることがわか る。X線回折の結果はFig.2(a)に示すように、high T_c相(H)を示すピークが多く見られ るが、002(H),004(H),008(H)が欠けている。これは熱処理条件に依存しており、焼成 温度や時間を少しく変化させればT_{c.end}が向上し上記のピークが出現するものと思われる。 また同図(c)に示す SEM 観察の結果から、部分的に薄片状(lamellar)状の形態が見ら れることがその特徴である。



Fig. 2 Characteristics of sample B in Table 1. (a) X-ray diffraction pattern, (b) temperature dependence of resistivity, (c) SEM photograph of the surface of the specimen.



Fig. 3 Characteristics of sample C in Table 1. (a) X-ray diffraction pattern, (b) temperature dependence of resistivity, (c) SEM photograph of the surface of the specimen.



Fig. 4 Characteristics of sample E in Table 1. (a) X-ray diffraction pattern, (b) temperature dependence of resistivity, (c) SEM photograph of the surface of the specimen.

次に試料C, Dを比較するとき、Table 1 の組成比は両者とも仕込み組成でありこれを熱処理すると high T_c相が得られるような組成比である。¹¹⁾ このとき Sr を基準にして試料C では Bi: Pb: Sr: Ca: Cu=0.96: 0.18: 1: 1.06: 1.60であり、試料Dでは Bi: Pb: Sr : Ca: Cu=0.93: 0.17: 1: 1: 1.58である。両者において Ca/Sr=1.06 (試料C), 1 (試料D) であり、また Cu/Sr=1.60 (試料C), 1.58 (試料D) なっている。Ca/Sr 比の相違が両者において大きいことがわかる。この相違が両者の T_c に差を与えたものと思われる。

いま **Fig. 3**に試料Cの特性を示す。これより Fig. 3 (a)を Fig. 2 (a)と比較して、002 (L),00<u>10</u>(H),00<u>12</u>(H),00<u>14</u>(H)の各相が試料Cにおいて試料Bより成長していること がわかる。Fig. 3 (b)からは T_{c.on} =106.8K, T_{c.mid} =103.3K, T_{c.end} =99.0Kが得られ た。 ΔT (= T_{c.on}-T_{c.end})=7.8Kであり、試料Bの ΔT =12.3Kよりも狭い。Fig. 3 (c) と同じく薄片状の形態が観察される。さて Table 1 に示した組成比は仕込み組成であり、熱 処理後 (sinter の後),試料Bと試料Cにおいてはそれぞれ、Sr を 1 として、Bi : Pb : Sr : Ca: Cu=1.10:0.13:1:1.32:1.66および1.26:0.15:1:1.32:1.77となっているこ とが蛍光X線分析 (X R F) により確かめられた。これより Bi/Sr, Pb/Sr, Cu/Sr が少 しずつ大きくなり Ca/Sr は殆ど変わらないことがわかった。このような組成比の変化が T_{c.end}の値を95.6K(B)→99.0K(C)に増加させた原因のひとつにあるものと思われる。

次に試料E, Fを比較するとき、両者とも Table 1 の組成比は仕込み組成であり、Bi:Sr :Ca:Cu=2:2:2:3の high T_c相を与えるものであり、Pbの代わりに Sbを添加し Bi+Sb=2としたものである。ただし試料Eは Bi:Sb=1.9:0.1, 試料Fは Bi:Sb=1.8 :0.2としている。Fig.4に試料Eの特性を示す。Table 1 の試料Aと同程度のT_{c.end}=51.8 Kしか得られず、試料Aの low T_c相を与える組成での転移温度に近いものであった。これ より Sb添加効果は殆どないことがわかった。(但し、Calcination や Sintering の温度やその 時間を変えれば他の結果が得られる可能性もあり断定はできない。)また Fig.4(a)からは、 Fig.2(a), Fig.3(a)と比較して low T_c相を与える結晶ピークが多く見られ、Fig.4(b) の低い転移温度とよく対応した。Fig.4(c)からは void や hole の多いような表面形態が観 察され、これも Fig.2(c), Fig.3(c)の lamellar 状の形態と比べて著しく相違した。こ れらの結果から Pb の代わりに Sb を high T_c相に添加して T_cを向上させる効果は、Table 1 の熱処理条件下ではむしろ負の要因となることがわかったが今後の検討課題である。

3. BPSSCO系薄膜高温超伝導体

3.1 試料の作成

Fig. 5に示すように、60-100 r.p.m.で回転しているホールダーに成膜用基板 MgO (100) を取り付け、3元ターゲットからの同時 RF マグネトロンスパッタリングをにより成膜する。 ターゲットは low T_c相を与える Bi:Sr:Ca:Cu=1:1:1:2なるもの(以下 SC と記 す)と、Bi,および Pbの単体金属である。¹²⁾スパッタリングの条件は**Table 2**に示したよ うに、SC ターゲットに印加される RF パワーを140W一定とし、Bi および Pb ターゲットに 印加する RF パワーを0~20Wの範囲で変化させている。スパッタ時の基板温度は550℃で あり、24時間のスパッタの後さらに24時間自然冷却する。その後アニーリングする必要があ り、このときの条件を、Bi および Pb ターゲットに印加する RF パワーの値と共に**Table 3**



Fig. 5 Schematic illustration of the sputtering system. Three targets are simultaneously discharged and the substrate holder is rotated over the targets.

に示した。(試料 I のみ熱処理条件を変化させた。) **Fig. 6** には Bi : Pb の RF パワーの値の mapping を示した。**Table 3** の $T_{c.end}$ の値と比較して試料D(および I)において薄膜とし ては高い転移温度が得られることがわかった。

Table 2 . Typical sputtering condition by RF magnetron

Target diameter : $125 \phi \times 5 t$ (three targets) RF power in target 1 (Bi) : $0 \sim 20 W$ target 2 (Bi₁Sr₁Ca₁Cu₂O_y) : 140 W target 3 (Pb) : $0 \sim 20 W$ Target-substrate distance : $150 \sim 160 mm$ Gas : Ar + O₂ = 10 ccm Gas pressure : $4.5 \sim 5.5 \times 10^{-3}$ Torr Gas ratio : Ar : O₂ = 9:1 Sputtering time : 24 hour Cooling time : spontaneous cooling $20 \sim 24$ hour Substrate : MgO(100) 10 mm × 10 mm × 0.5 t Substrate temperature : 550 CRevolution number of substrate : $60 \sim 100 r. p. m$ Film thickness : $0.6 \sim 2.3 \mu m$

Table 3.	Preparation	of thin	film	sample
----------	-------------	---------	------	--------

l	RF power ratio(W)	Annealing	Tc, end
Sample	Bi : Pb (SC=140W)	temp(℃) time(h)	(K)
A	0 : 10	850 15	53. 1
В	20 : 20	850 15	55.0
С	10 : 15	850 15	55.2
D	15 : 10	850 15	62.6
E	20 : 10	850 15	40.6
F	15 : 20	850 15	35.0
G	10 : 20	850 15	58.1
H	5 : 10	850 15	60.7
Ι	5 : 15	850 8	
		850 7	64.9
		850 5	62.5
		830 5	

Bi₁Sr₁Ca₁Cu₂0y →140W const



Fig. 6 Relationship between RF power applied on the Bi target and the one applied on the Pb target.

3.2 試料の特性

Table 3 の試料 A の特性を **Fig. 7** に示す。Fig. 6 よりこの試料 A は Bi を含まず、Bi:Sr :Ca:Cu=1:1:1:2の仕込み組成のターゲットと単体金属 Bi のターゲットから成膜 したものである。ディフラクトメータによる X線回折 (X R D)の結果からは同図(b) に示 すように low T_c相を与える結晶ピークのみが同定された。¹²⁾ また同図(b)より、T_{c.on}= 69.9K, T_{c.end}=61.7K で Δ T(=T_{c.on}-T_{c.end})=8.2K とやや大きい結果が得られた。さら に同図(c)よりは針状の表面での形態が明瞭に観察された。これは Fig. 2, Fig. 3, Fig. 4 のバルク表面では見られなかった形態である。

、次に **Fig. 8**には、**Fig.** 6 において Pb RF power 10Wの点A から右方向へ伸びた試料H, D, Eの表面の観察結果を示す。これより Fig. 7 の結果をも併せてみると、Bi の RF powerを増加させて膜中の Bi 含有量を増加させると、表面の形態が針状(needle-like)から薄 片状(lamellar)に変化することが明瞭に観察される。また同図(c)からは正方形,長方形, 正 6 角形に近いような形態が見られるが、これが必ずしも高い T_cには結び付かず、むしろ 試料 Eの方が試料 H よりも T_{c.end} は低い。このように high T_c 相を与えることが期待でき る相を部分的に含んでいてもそれが少なければ他の多くの low T_c 相中に埋没し抵抗特性と しては low T_c 相での値が支配的となる。

-228 -



Fig. 7 Characteristics of sample A in Table 3. (a) X-ray diffraction pattern, (b) temperature dependence of resistivity, (c) SEM photograph of the surface of the specimen.



(a) Sample H (T_c,end = 60.7K)



(b) Sample D (T_c,end = 62.6K)



(C) Sample E (T_c.end = 40, 6 K)

Fig. 8 SEM photographs of the free surface of (a) the sample H, (b) the sample D, (c) the sample E in Table 3.

いま **Fig. 9** に、これらの試料H, D, EのXRDによる測定結果を示す。これより殆どの結晶ピークは low T_c相のものであるが00<u>16</u>(H)ピークのみが試料Eにおいて他のH, D の各試料の場合よりもよく発達していることがわかる。このことが Fig. 8 (c)で観察される特異な表面形態(正方形,長方形,正6角形)に関係があるものと思われるが、今後の検討課題となろう。

Fig.10には、Fig.6 において Pb RF power 20Wのとき右方向の Bi RF power 増加方向へ 伸びたときの試料G,BについてのXRDおよび表面観察の結果を示す。これより Fig.6 において Pb RF: Bi RF=1:1の線より上部の試料と下部の試料では、Fig.7のA,Fig. 8のH(上部—needle-like)と、Fig.8のD,E(下部—lamellar)における表面形態の相 違と同じ傾向のあることがわかる。すなわち、試料Gは1:1の線より上部にあり、試料B は上部下部の中間点であり、Fig.10(a),(b)からそのような傾向を読み取ることができる。 特に試料Bからさらに右方向に進めばまた薄片状(lamellar)の表面形態が観察されるも のと思われるが、丁度、試料Bは分岐点の組成であり、needleが集まってまさに lamellar に移る過渡的な形態である。







Fig.10 X-ray diffraction pattern and SEM photograph of the free surface of ^(a) sample G, (b) sample B in Table 3.

さて、熱処理条件が異なるが、Table 3 で最も高い T_{c.end} を示す試料 I の特性を Fig.11に 示す。同図(c)の表面形態からは、needle-like と lamellar なものの混在が認められ、Fig. 6 の1:1の線で区分する規則性を準用することができよう。このとき同図(b)より T_{c.end} =64.9Kと最も高い値が得られた。また同図(a)からは、Fig.7(a), Fig.9, Fig.10など のX R Dの結果と比べて結晶ピーク数が減少し結晶パターンが単純化され、それだけ結晶性 が増したものと思われる。また002(L)のピークの高さが相対的に他のピークよりも高まっ ており、同じく Fig.7(a), Fig.9, Fig.10のそのような結果と比較して明らかに相違し ておりそれだけ low T_c相(80K級)の発達があったものと思われる。

Fig.12には、この試料 I の熱処理条件に変化させた場合の表面形態の観察結果を示す。すなわち、同図(a)には850℃×8h、(b)には850℃×5h,(c)には830℃×5hの各場合の結果を示す(Fig.11は850℃×7h であった)。これより Fig.11の850℃×7h より1時間多い850℃×8hの条件にすれば最早、非超伝導(non-superconducting)となり、そのときの表



Fig.11 Characteristics of sample I in Table 3. (a) X-ray diffraction pattern, (b) temperature dependence of resistivity, (c) SEM photograph of the surface of the specimen.



(a) Sample I 850°C × 8h (non-superconducting)



(b) Sample I 850°C x 5h (T_c, end = 62.5K)



(C) Sample I 830°C × 5h (non-superconducting)

Fig.12 SEM photographs of the free surface of sample 1 under the annealing conditions of (a) 850°C ×8 h (non-superconducting), (b) 850°C ×5 h (superconducting), (c) 830°C ×5 h (non-superconducting).

面形態は極めて鋭い needle が生成していることがわかった。しかし850℃×5hという Fig.11より2時間少ない条件下では依然として超伝導状態であり Fig.11(c)に近い表面形 態が得られた。次に830℃×5hという、20℃低い条件にすると、また非超伝導になり、その 表面形態には鋭敏な needle が見られた。

Fig.13には、Fig.12の熱処理条件に対応した試料のXRDの結果を示す。これより非超伝 導となる試料の場合、002(L)の結晶ピークの発達が殆どなく、超伝導となる試料ではその ピークがよく発達していることがわかる。このことから Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系薄膜超伝導 体試料では low T_c相を与えるのは002(L)のピークに由来した結晶であるものと思われる。 ここで試料 I の as deposited 状態の組成比と、Fig.11の850℃×7hの熱処理条件下で成膜 した場合の組成比を、誘導結合プラズマ法 (Inductively coupled plasma, ICP) により測 定したところ、Srを1として as deposited では (Bio.38 Pbo.83) + Sr1Ca1.16 Cu3.01 Oy であり、 850℃×7hの熱処理後では (Bio.05 Pbo.55) + Sr1Ca0.92 Cu2.34 Oy なる結果が得られた。



Fig.13 X-ray diffraction patterns of sample 1 under the annealing conditions of (a) 850°C ×8 h (non-superconducting), (b) 850°C ×5 h (superconducting) (c) 830°C ×5 h (non-superconducting).

4. 考察

以上、Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系のバルクおよび薄膜につき、その試料の作成と特性を述べた。 すなわち、バルクについては high T_c相($T_{c.end}$ =99.0K)が得られ、薄膜については low T_c相($T_{c.end}$ =64.9K)が得られた。

いま、Fig.14(b)に Bi₂Sr₂Ca₂Cu₃O_yの high T_cを与える結晶構造を示す。¹³⁾ 我々の試料 は Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系であるから、添加した Pb がどの site に入るかということが重要 である。同図(a)に示すように、Bi, Sr, Ca 原子の存在する各 site に Pb 原子が置換され る形で入ることがわかる。このことが抵抗特性において裾の引かない、しかも転移幅の小さ い high T_cをもたらす要因となる。同図(c)には Ca 層を挟む 2次元平面 CuO₄ とそれ以外 の層をブロック化して区別したものを示す。すなわちCuO₄平面を含む Ca 層を挟んで向か い合わせにピラミッドCuO₅が対向しており、そのピラミッドと次のピラミッドの間に Bi₂ O₂層が挿入されたようになっている。これを、いま B 層と名付けると、この B 層が荷電調 節の役割を担っており、B 層中の過剰な酸素の存在のためプラス電荷の正孔がピラミッド型 CuO₂面へ供給されることになる。



Fig.14 Crystal structure of the high T_c phase in the Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O system.

次に**Fig.15**に (Bi (Pb)O)₂ Sr₂Ca_{n-1} Cu_nO_{2n+2} なる形式で組成比を表した場合の n = 1~5の結晶構造を示す。¹⁴⁾

ここでn=3とした場合(Bi(Pb))₂Sr₂Ca₂Cu₃O₁₀となりFig.14のhigh T_c相の結晶構 造を表す。我々の薄膜試料ではlow T_c相のみが得られたのでn=2とおき、(Bi(Pb))₂ Sr₂Ca₁Cu₂O₈なる2212組成のlow T_c相の結晶構造が対応する。前述の我々の薄膜試料では 3つのターゲットのうちのSCがBi₁Sr₁Ca₁Cu₂である故Fig.11においてT_{c.end}=64.9Kし か得られなかったが、これをBi₂Sr₂Ca₂Cu₃の組成比のものを用いることにより、Fig.15の nの値を2から3へ増加させればhigh T_c相(100K級つまりバルクと同じ値)が得られる であろう。(今後の検討課題として予定している。)



Fig.15 Structure of $(Bi (Pb) O)_2 Sr_2Ca_{n-1}Cu_n O_{2n+2}$, in which n is 1-5 representing the number of CuO₂ layers between adjacent Bi (Pb)₂O₂ layers.

5. 結言

以上より得られた結果は次の通りである。

- (1) Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系バルク超伝導体は仕込み組成 Bi:Pb:Sr:Ca:Cu=1.84:0.34
 :1.91:2.03:3.06でT_{c.end}=99.0Kを得たが、このときの熱処理後の組成比は Sr を 1として Bi:Pb:Sr:Ca:Cu=0.96:0.18:1:1.06:1.60であった。(Fig.3(b))
- (2) $T_{c.end} = 99.0 \text{ K} o \text{ high } T_c \text{ } 相 o 表面 形態は lamellar なものであった。(Fig. 3 (c))$
- (3) ここで Pb を Sb に置換した仕込み組成比 Bi:Sb:Sr:Ca:Cu=1.9:0.1:2:2:
 3 なるバルク試料において T_{c.end}=51.8Kと低下した。またそのときの表面形態には void や hole が多く発生した。(Fig. 4)
- (4) 3元ターゲット、すなわち、Bi₁Sr₁Ca₁Cu₂(SC), Bi, Pbの各ターゲットの同時スパッ タリングにより成膜した Bi-Pb-Sr-Ca-Cu-O 系薄膜超伝導体は、ターゲットの RF パ ワー比にして SC: Bi: Pb=140:5:15(W)の条件で成膜し、850℃×7hの熱処理に より T_{c.end}=64.9Kを得た。(Fig.11)
- (5) Pb を添加しない Bi-Sr-Ca-Cu-O 系の試料は T_{c.end}=53.1Kと低く、且つその表面形態 は針状(needle-like) であった。(Fig. 7)
- (6) PbのRFパワーを一定にしBiのRFパワーを増加させてゆくと、薄膜の表面形態は needle-like から lamellar へと変化した(Fig. 8)。そしてこのときT_{c.end}の高い試料ほど002(L)の結晶ピークがよく発達していることがわかった。(Fig. 9)
- (7) Fig.11の試料 I (T_{c.end}=64.9K) において熱処理時間を増加させたり、熱処理温度を 低下させると非超伝導状態になった(Fig.12)。その場合002(L)の結晶ピークの発達が 見られなかった。(Fig.13)
- (8) high T_c相の結晶構造モデル図において、Pb原子の入る位置を示した(Fig.14(a))。
 また CuO₄ 平面を含む Ca 層を挟んで対向しているピラミッド型 CuO₂ 面上へ、Bi₂O₂
 層(Fig.14(c)のB層)からの正孔の供給が超伝導性の原因であることを示した。
- (9) low T_c 和の結晶構造のモデルは(Bi(Pb)O)₂ Sr₂Ca_{n-1} Cu_nO_{2n+2} なる形式で n = 2の場合であった。(Fig.15)

謝辞

本研究を遂行するに当たり、大阪府立大学教授奥田昌宏氏、助教授黒澤宏氏には種々御検 討して戴き、且つ御助言を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 1) J.B.Bednorz and K.A.Müller: Z. Phys. **B64** (1986) 189.
- M.K.Wu, J.R.Ashburn, C.J.Torng, P.H.Hor, R.L.Meng, L.Gao, Z.J.Huang, Y.Q.Wang and C.W.Chu: Phys. Rev. Lett. 58 (1987) 908.
- 3) H.Maeda, Y.Tanaka, M.Fukutomi and T.Asano: Jpn. J. Appl. Phys. 27 (1988) L209.
- 4) Z.Z.Sheng and A.M.Hermann: Nature **332** (1988) 138.
- 5) S.A.Sunshine, T.Siegrist, L.F.Schneemeyer, D.W.Murphy, R.J.Cava, B.Batlogg, R.B.van Dover, R.M.Fleming, S.H.Glarum, S.Nakamura, R.Farrow, J.J.Krajewski, S.M.Zahurak, J.V.Waszczak, J.H.Marshall, P.Marchy, L.W.Rupp, Jr. and W.F.Peek : Phys. Rev. B38 (1988) 893.
- 6) S.M.Green, C.Jiang, Yu Mei, H.L.luo and C.Politis: Phys. Rev. B38 (1988) 5016.
- M.Takano, J.Takada, K.Oda, H.Kitaguchi, Y.Miura, Y.Ikeda, Y.Tomii and H.Mazaki: Jpn. J. Appl. Phys. 27 (1988) L1041.
- 8) 松下、鈴木、青木他:応用物理学会講演平成元年春 2 p-PC-15.
- 9) 松下、鈴木、青木他:応用物理学会講演平成元年秋 28p-PB-19.
- 10) M.R.Chandrachood, I.S.Mulla and A.P.B.Sinha: Appl. Phys. Lett. 55 (1989) 1472.
- 11) S.Koyama, U.Endo and T.Kawai: Jpn. J. Appl. Phys. 27 (1989) L1861.
- 12) K.Kuroda and K.Hamanaka: Jpn. J. Appl. Phys. 28 (1989) 1586.
- N.Kijima, H.Endo, J.Tsuchiya, A.Sumiyama, M.Mizuno and Y.Oguri : Jpn. J. Appl. Phys. 28 (1989) L787.
- 14) M.Kanai, T.Kawai, S.Kawai and H.Tabata: Appl. Phys. Lett. 54 (1989) 1802.